

浄土院

浄土院は平等院の塔頭^{たつとう}で、浄土宗の栄久上人^{えいく}が、明応年間（十五世紀後半）に平等院修復の為に開創した寺と伝わり、『都名所図絵』には「平等院奥院」「浄閣」などと示されている。江戸時代には養林庵や知学庵など浄土院の子院が鳳凰堂西南を中心に多数存した。浄土院には平等院に関係する多くの文化財が残されている。そのうち、養林庵書院（重要文化財）は桃山城の遺構と伝えられ、障壁画は、床の間の図が雪景山水図、襖^{ふすま}は籬^{きりぎりす}に梅図、天袋^{てんたい}は花卉図で構成され、作者は、その作風から狩野山雪と考えられ、京狩野の代表的作家の特色を著した作品として、その価値は極めて高い。

また京都府指定文化財として平等院修造勧進状二巻・平等院旧起二巻、細川三斎作庭と伝わる養林庵書院庭園があり、宇治市指定文化財として、木造帝釈天立像（平安時代後期）、木造阿弥陀如来立像（鎌倉時代後期・南北朝時代）、和漢朗詠集卷下断簡（平等院切）（平安時代末期）がある。

帝釈天立像は、やさしい着衣にやや重い感じを付加され、程よい量感のなかで、少年相の清純な感じの相貌や、浅く柔らかな衣紋表現^{えもん}に、十世紀末から十二世紀前半にかけて活躍した、仏師康尚^{じやうじやう}（定朝の師）の特色がはつきりと滲みでている。阿弥陀如来立像は、ヒノキ材を用いた寄木造りの堂々たる大作の像で、両手首先から台座を含めて当初のまま残っている。うつむきぎみの頭部、生々しい感触を持つ指先などに当代の特色がよく示されている。

和漢朗詠集卷下断簡は、卷下雑部のうち、禁中・古京の全文十五行文である。古来筆者を源頼政（一一〇五～一一八〇）と伝え、平等院切という名称も頼政との関係で付されたと思われる。本稿は平等院切の中でも、全十五行文の断簡として大きく、古筆研究はもとより、国文研究などの資料としても貴重である。

また、古図によると平等院山内で最も古い書院として大書院（非公開）があり、蘭香齋玉寶の獅子図四面や後醍醐天皇が三種の神器を納め平等院に逗留したと伝えられる御座所などが残されている。



大書院 蘭香齋玉寶画獅子図









初瀬

浄土院羅漢堂 一棟

桁行三間 梁行二間 一重 入母屋造 本瓦葺

江戸時代 寛永十七年（一六四〇）

棟札からは、この堂は寛永十七年に建立され、大工は京の善衛門、仏師が京の伊兵衛、播主（施主）は星野浄安道斎（宇治茶師）とその息子たちであり、肝煎^{きまひり}は藤村味斎・井上九左衛門であることがわかる。また、江戸時代の地誌「都名所図絵」巻五などによると、堂全体の形式や、その位置が変化していないことが知られる。

主要部材は、建立当時そのままに保存され、内部の鏡天井に描かれた龍の彩色画の保存状況も良好で、なおかつ和様が主流の平等院内の建物群にあつて禅宗様を主体とした特異な存在で、美術的・歴史的価値が極めて高く貴重である。

なお、寛永十七年の記がある棟札と銘札一枚、羅漢堂の扁額一面、須弥壇一基、十六羅漢像一括も、羅漢堂の価値をさらに高めるものとして附指定になっている。

また建立時の勧進名簿や願文約千紙近くが長押上小壁に木箱にて残され、当時の風俗を知ることができる。



羅漢堂 鏡天井画



南無阿彌陀佛



通圓家初代太敬庵通圓の墓

通圓家の初代は、古川右内といい、源頼政の家臣でした。頼政から

「政」の字を賜って太敬庵通圓政久と名乗り、平治の乱の直後、宇治橋の東詰に庵を結びました。

治承四（一一八〇）年頼政が以仁王を奉じて平氏打倒の兵を挙げると、頼政のもとへ馳せ参じて宇治橋の合戦で平家の軍と戦い、討ち死にを遂げました。

この主従関係を物語った狂言として「通圓」があり、たびたび公演されています。



石造層塔 一基
鎌倉時代・十三世紀
総高三七・八・五 基壇八〇・〇
角 厚二二・二
花崗岩の二柱に就いた瀟洒な
均整美をほこり、民間伝来の石塔
として随一の造形美を有す。かつて
近代日本に「鉢山王」の異名を取り、
政治家として活躍した久原房之助
（一八六九―一九六五）が惜愛した
もの。端正で、いわゆる「都ぶり」を
遺憾なく発揮しながら層数の変化
など奔放にして優美、純美、可憐さを
あわせ持った絶妙な塔と評される。
平成二十二年八月二十五日
センチユリ文化財団考證

石造層塔

一基

鎌倉時代・十三世紀

総高三七八・五

基壇八〇・〇

角 厚二二・二

花崗岩の一柱に統一した瀟洒な

均整美をほこり、民間伝来の石塔

として随一の造形美を有す。かつて

近代日本に「鉾山王」の異名を取り、

政治家として活躍した久原房之助

へ一八六九―一九六五〇が惜愛した

もの。端正で、いわゆる「都ぶり」を

遺憾なく発揮しながら層数の変化

など、奔放にして優美、純美可憐さを

あわせ持った絶妙な塔と評される。

平成二十二年八月二十五日

センチユリー文化財団寄贈





二平治茶祖
竹庵の碑誌
元禄十二年

上林竹苑政聖碑誌

不立乎歲時之下所以死之重於大山者也居乎殺身成仁也所以生之輕於鴻毛者也死生之道六教經之所由也水行不避
山行不避也陸行不避虎豹者死之勇也白刃交於前視死若生者烈士之勇也可謂義理之聞者知所向背也上林氏越前政聖印
君自佐佐木承賴生於丹波上林園以爲姓其後居佐山城國宇治元龜二年卒未赴參劄奉仕 東照太神君賜出呂御內百石且授印
君爲居元忠內藤家長松平家忠松平近政等監守伏見城將卒未集四面環攻城無奮戰防之深尾氏爲敵所敗火松平城半燒
亦偏在城中告衆與多寶氏出城遇將金吾黃門秀秋秀秋曰衆皆出城則可全首領汝早歸告此言竹苑曰 神君有命乎否不歸
之曰從從從 神君之衆遇見義勇爲休恩捨命此其所期也何以避之哉乃勵衆無手持酒盃誦誦巡彼共勉乃先早冒之上自兼中騎
馬而政信幼而在宇治園伏見之變進于高野山也關原大捷之後 神君召政信感亡父之志兼知代官之事元和年中難波冬臺之役
神君曰來哉可參江府追實前志西歸之後及明東來於緒根馬場經年而先兵卒政以亦稱天兵備有子曰政年曰定政曰政信
不與而先弟政富代之尋先定政者其兄也養於他家然以政爲子歸絕其家宣元五年己巳十一月奉拜 嚴有公時賜舊領授印
今大君且拜戴印章家傳如此今歲己卯八月朔日正當竹苑一百周年忌辰定政不堤感往懷舊之情
子等院諸余記其高功鳴呼忠孝之心無貴賤一也竹苑不避其難者知理向義乎定政追遠奉先者後本顯名乎忠孝之名雖異其揆則一
也 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

朝敬大文守國寺榮酒登宇林

宇治茶祖

竹庵の
碑誌

元禄十二年







